

桜川市いじめ防止基本方針



平成26年6月

桜川市

はじめに

いじめは、いじめを受けた児童生徒の教育を受ける権利を著しく侵害し、その心身の健全な成長及び人格の形成に重大な影響を与えるのみならず、その生命又は身体に重大な危険を生じさせるおそれがあるものです。

このことから、桜川市は、児童生徒の心身の健全な育成を図るとともに、その生命又は身体をいじめから守るべく、学校・地域住民・家庭その他の関係者の連携の下、いじめの問題の克服に向けて取り組むよう、「いじめ防止対策推進法」（以下「法」という。）に基づき、「いじめの防止等のための基本的な方針」（以下「国の基本方針」という。）や「茨城県いじめ防止基本方針」（以下「県の基本方針」という。）を参酌し、いじめ防止等（いじめの防止、いじめの早期発見及びいじめへの対処をいう。以下同じ。）のための対策を総合的かつ効果的に推進するため、「桜川市いじめ防止基本方針」（以下、「市の基本方針」という。）を策定いたしました。

本市は、今後、この「市の基本方針」に基づき、学校、地域住民、家庭、その他の関係者と協力して、いじめ問題に対して、その克服に向けて真剣に取り組んでまいります。いじめ防止等は、何よりも学校、地域、家庭はもとより社会が一丸となって取り組むことが必要です。市民の皆様のご理解とご協力をお願いいたします。

平成 26 年 6 月

桜川市長 大塚 秀喜

※ この「市の基本方針」は、市内の小学校、中学校に在籍するすべての児童生徒を対象として作成するものである。

なお、桜川市は、法に基づき各学校におけるいじめ防止基本方針（以下「学校の基本方針」という。）の策定や学校のいじめ防止等の取組について必要な措置を講ずるものとする。

目 次

はじめに

I いじめ防止等の対策に関する基本的な考え方

- 1 いじめの定義
- 2 桜川市の基本的な考え方

II 桜川市の取組

- 1 「桜川市いじめ問題対策連絡協議会」の設置
- 2 教職員の研修の推進
- 3 インターネットを通じて行われるいじめ問題への取組
- 4 相談体制の周知
- 5 豊かな心の育成の推進
- 6 「市の基本方針」等の周知と啓発
- 7 市立学校に対する取組

III 学校の取組

- 1 いじめの対応
- 2 いじめ防止等に関する措置
- 3 関係機関等との連携
- 4 教職員の研修

IV 家庭の役割

- 1 保護者の責務
- 2 未然防止と早期発見
- 3 早期解消に向けた取組

V 地域の役割

- 1 未然防止に向けた取組
- 2 早期対応に向けた取組

I いじめ防止等の対策に関する基本的な考え方

1 いじめの定義

いじめとは、「児童等に対して、当該児童等が在籍する学校に在籍している等当該児童等と一定の人的関係にある他の児童等が行う心理的又は物理的な影響を与える行為（インターネットを通じて行われるものを含む。）であって、当該行為の対象となった児童等が心身の苦痛を感じているもの」（法第2条1項）をいう。なお、いじめの発生場所は、学校の内外を問わない。

○ 具体的ないじめの態様について

- 冷やかしやからかい、悪口や脅し文句、嫌なことを言われる
- 仲間はずれ、集団による無視をされる
- 軽くぶつかられたり、遊ぶふりをして叩かれたり、蹴られたりする
- ひどくぶつかられたり、叩かれたり、蹴られたりする
- 金品をたかられる
- 金品を隠されたり、盗まれたり、壊されたり、捨てられたりする
- 嫌なことや恥ずかしいこと、危険なことをされたり、させられたりする
- パソコンや携帯電話等で、誹謗中傷や嫌なことをされる 等

2 桜川市の基本的な考え方

(1) 方針策定の意義

「いじめはどの子どもにも、どの学校でも、起こりうる」ものであるため、未だ、いじめによって、児童生徒の生命や心身に重大な危険が生じる事案が少なからず発生している。

いじめから一人でも多くの子どもを救うためには、児童生徒を取り巻く大人一人一人が、「いじめは絶対に許されない」、「いじめは卑怯な行為である」との意識をもち、いじめの状況をいち早く把握し、迅速に対応することが必要である。いじめの問題は、心豊かで安全・安心な社会をいかにしてつくるかという、学校を含めた社会全体に関する国民的な課題である。

このように、社会総がかりでいじめの問題に対応するため、基本的な理念や体制を整備することが必要であり、それぞれの役割と責任を自覚しながら連携し、社会全体で児童生徒を見守ることが重要である。

(2) 基本理念

いじめは、全ての児童生徒に関係する問題である。いじめ防止等の対策は、全ての児童生徒が安心して学校生活を送り、様々な活動に取り組むことができるよう、学校の内外を問わず、いじめが行われなくなるようにすることを旨として行われなければならない。

また、全ての児童生徒がいじめを行わず、いじめを認識しながら放置することがないように、いじめ防止等の対策は、いじめが、いじめられた児童生徒の心身に深刻な影響を及ぼす許されない行為であることについて、児童生徒が十分に理解できるようにすることを旨としなければならない。

加えて、いじめ防止等の対策は、いじめを受けた児童生徒の生命・心身を保護することが特に重要であることを認識しつつ、国、地方公共団体、学校、地域住民、家庭その他の関係者の連携の下、いじめ問題を克服することを目指して行われなければならない。

(3) 基本姿勢

ア 児童生徒の豊かな心を育み、いじめの未然防止に努める。

イ いじめの早期発見に努め、認知した場合は、迅速に対応する。

ウ 市民のいじめ問題に関する意識を高め、市民全体でいじめ問題に取り組む環境を整える。

II 桜川市の取組

1 「桜川市いじめ問題対策連絡協議会」の設置

いじめ防止等に関係する機関及び団体が情報共有及び連携を図るため、法第 14 条第 1 項の規定により、学校、市教育委員会、児童相談所、桜川市警察署等の関係機関等により構成される「桜川市いじめ問題対策連絡協議会」（以下「連絡協議会」という。）を設置する。なお、この設置に関し必要な事項については、別に定める。

2 教職員の研修の推進

いじめ問題の現状や未然防止、早期発見、早期解消に向けた具体的な対応について理解を深めるなど、教職員の資質の向上を図るため、桜川市生徒指導連絡協議会等において、インターネットを使ったいじめの対応や望ましい人間関係を作るための研修を充実させる。

3 インターネットを通じて行われるいじめ問題への取組

インターネットを通じて行われるいじめを防止するとともに、効果的に対処することができるようにするなど、児童生徒及び保護者に対して、インターネットの利便性や危険性の理解に必要な啓発のための研修会を開催するよう、各学校に要請する。

4 相談体制の周知

児童生徒等がいじめ問題について相談できる機関等の周知に努め、いじめを受けている児童生徒やその保護者のみでなく、周りの友達や大人からも広く情報を収集し、いじめの早期発見、早期解消を図る。

5 豊かな心の育成の推進

桜川市豊かな心育成推進協議会における研修を充実させ、学校はもとより社会全体で児童生徒の豊かな心を育む活動を推進することにより、いじめ防止を図る。

6 「市の基本方針」等の周知と啓発

法や「市の基本方針」について、学校、保護者、地域住民等に周知し、それぞれの役割について理解を深めることを通して、いじめ防止等に向けた社会全体の教育力の向上を図る。また、国及び県の通知や調査結果をはじめ、最新のいじめ問題に関する情報を積極的に収集し、適宜学校へ周知することで、学校のいじめ問題対応の取組を推進させる。

7 市立学校に対する取組

(1) 「桜川市教育委員会いじめ調査委員会」の設置

市立学校におけるいじめの重大事態への対処又は同種の事態の発生防止のため、法 28 条 1 項の規定により、市教育委員会にいじめの調査を行う組織として、「桜川市教育委員会いじめ調査委員会」（仮称、以下「調査委員会」という。）を設置する。なお、この設置に関し必要な事項については、別に定める。

調査委員会は、いじめを背景とした重大事態が発生した場合、市教育委員会教育長の要請に応じ、その事実関係を明確にするための調査を行い、その結果を市教育委員会教育長に報告する。また、必要に応じて、当該調査に係る重大事態への対処又は同種の事態の発生防止のための必要な措置について助言を行う。

(2) 学校のいじめ取組状況の点検

いじめに関する各学校の取組状況を毎月調査、把握し、それらの取組が当該の学校や地域の実状に応じて機能しているかを点検するとともに、必要に応じて指導と助言を行う。

(3) スクールカウンセラー等の活用

いじめの早期発見，早期解消に努めるとともに，児童生徒の心のケアを図るため，県派遣のスクールカウンセラーや桜川市教育支援センター配置のカウンセラー等の有効活用を図る。

(4) 状況の調査と把握

学校からいじめが起こったと報告を受けた場合には，学校と連携して状況を把握する。発生したいじめが重大事態で，より詳しい調査が必要な場合，学校と「桜川市いじめ再調査委員会」（仮称）が連携して調査や分析等を行う。

Ⅲ 学校の取組

1 いじめの対応

(1) 「学校の基本方針」の策定

各学校は，法第13条の規定に基づき，県と市の基本方針を参酌して，どのようにいじめ防止等の取組を行うかについて，基本的な考え方や取組の内容等を盛り込んだ「学校の基本方針」を策定する。

(2) いじめ防止等の対策のための組織の設置

各学校は，いじめ防止等に関する対応を効果的に行うため，校長，教頭，教務主任，生徒指導主事，学年主任，養護教諭，その他必要なメンバーにより構成するいじめ防止等の対策のための組織を設置するものとする。

当該組織は，学校が組織的にいじめ問題に取り組むに当たって中核となり，以下の役割を担う。

ア 「学校の基本方針」に基づく取組の実施や，具体的な年間指導計画の作成，実行，検証，修正を行う。

イ いじめの兆候を把握した場合やいじめの相談があった場合には，速やかに当該組織の「ケース会議」を開き，その情報の共有と関係児童生徒への事実関係の聴取を行い，いじめであるかどうかの判断をする。

ウ いじめが発生した場合，いじめに関する指導や支援の体制，対応方針を決定する。

エ いじめ対応等の取組が計画どおりに進んでいるかどうかの確認やいじめの対応がうまくいかなかったケースの検証などを行い，「学校の基本方針」及びそれに基づくいじめ防止等の取組について，P D C Aサイクルにより改善を図る。

オ 重大事態が起きた場合，学校設置者と連携し，収束に向け速やかに対応する。

カ 児童生徒及び保護者からのいじめの相談や連絡を受け付ける体制を整備する。

キ 地域にいじめの目撃情報などの提供を呼びかけ，連絡を受けた場合には速やかに対応する。

2 いじめ防止等に関する措置

(1) 未然防止

児童生徒の豊かな心を育成し、心の通う対人交流の能力の素地を養うことが、いじめ防止に資することから、道徳教育や体験活動等の充実を図るとともに、全ての教育活動を通して社会性を育む。

ア 授業，学級活動やホームルーム活動

授業，学級活動やホームルーム活動で，児童生徒の自己指導能力（そのとき，その場で，どのような行動が適切か，自分で考えて，決めて，実行する能力）を高め，社会性を育む。また，児童生徒が協力して行う活動を計画的に取り入れることによって，いじめの起こりにくい学級・ホームルームの環境をつくり出す。

イ 児童会活動，生徒会活動，学校行事，部活動

いじめに向かわない児童生徒を育成するため，学校行事やその準備等の中で全ての児童生徒が活躍できる場面や役割を設定し，児童生徒が他の児童生徒から認められる体験をもつことによって，自己有用感（自分は認められている，自分は大切にされているといった思い）を高める。また，体験活動やボランティア活動等を通じて，自分を律していく力と判断していく力を身に付けていくことによって，児童生徒の規範意識を高める。

ウ 教育相談と個別相談

いじめ問題が深刻になる前にいじめを認知し，適切な対応がとれるよう，日頃から児童生徒と接する機会を多くもち，児童生徒が教職員と相談しやすい関係を構築する。また，定期的に行う児童生徒との個別面談のときにも，いじめの被害を受けていないか等を確認する。

さらに，必要に応じて，スクールカウンセラー等を活用することを通して，教育相談体制を整える。

エ インターネットを通じて行われるいじめ

インターネットを通じて行われるいじめは発見しにくいいため，児童生徒から情報を収集し，その把握に努める。また，情報が拡散すると完全な消去が困難であることから，児童生徒がインターネットの使用について自ら判断し，適切に活用できるよう，発達段階に応じた情報モラル教育を推進する。

(2) 早期発見

教職員は，いじめはどの児童生徒にも，どの学校においても起こりうるという共通認識をもち，全ての教育活動を通じて，児童生徒等の観察等を行うことで，変化を敏感に察知し，いじめを受けているという兆候を見逃さないように努力する。特に，ささいな兆候であってもいじめではないかと疑われる場合は，早い段階から児童生徒へ個別に声かけや相談等の関わりをもち，的確に状況の把握を行う。

ア アンケート調査

いじめに関するアンケート調査を定期的に行い、いじめの早期発見に努める。アンケートには、学校で起こったいじめのみでなく、学校外で起こったいじめもアンケートに記入させる。その際いじめであると特定できなくても、疑わしい状況があれば記入するように指導する。

イ 保護者との連携

学校での児童生徒の様子や学校の取組を、必要に応じ随時家庭に連絡するなど、日頃から保護者との連携を密にすることによって、家庭で少しでも児童生徒の異変に気付いた場合、保護者から学校へ気軽に相談してもらえ関係づくりに努める。

ウ 相談窓口の周知

いじめの相談については、保健室や相談室の利用とともに、電話等による相談窓口など、複数の相談窓口を児童生徒や保護者へ周知する。

(3) 早期解消に向けた取組

いじめの連絡、相談を受けた場合には、速やかに被害者の安全を確保するとともに、いじめ防止等の対策のための組織の「ケース会議」を開き、校長のリーダーシップの下、当該いじめに対して組織的に対応する。

ア 被害者の保護

いじめの行為を確認した場合には、いじめられている児童生徒を守り通すことを第一とする。また、被害者の保護者へ速やかに連絡を取り、状況の説明を行うとともに、家庭での心のケアや見守りを依頼する等、協力して対応する。

イ 実態の把握

被害者、加害者及び周辺の児童生徒から十分に話を聴き、いじめの事実を確認する。また、アンケートや個人面談等を実施し、速やかに実態の把握を行う。

学校だけでは解決が困難な場合、事案に応じた専門機関等と連携し、解消に向けた対応を図るとともに、把握した事実を学校設置者に報告する。

ウ 加害者への対応

加害者については、いじめをやめさせ、毅然とした姿勢で指導をする一方、しっかりと寄り添い、いじめを繰り返さないよう支援をする。

また、加害者の保護者へ速やかに連絡を取り、状況の説明を行うとともに、被害者やその家族への対応に関して必要な助言を行う等、協力して対応する。

エ 重大事態の調査とその対応

いじめを背景とした重大事態について、いつ、誰から行われ、どのような態様であったか、いじめを生んだ背景事情や児童生徒の人間関係にどのような問題があったか、学校・教職員がどのように対応したかなどの事実関係を、詳細かつ速やかに調査する。

その調査については、桜川市教育委員会を通じて桜川市長へ報告する。

その調査結果をもとに、再調査を行う必要があると認められた場合、学校は再調査を行う組織に積極的に資料を提供するとともに、その再調査の結果や助言を重んじ、主体的に再発防止に取り組む。

オ インターネットを通じて行われるいじめへの対応

児童生徒がインターネット上に不適切な書き込み等を行った場合、被害の拡大を避けるため、削除させる等の指導を行い、削除ができない場合には、プロバイダーに削除を求めるなどの措置を速やかに講じる。こうした措置をとるにあたり、必要に応じて法務局の協力を求める。

3 関係機関との連携

(1) 保護者

学校は、児童生徒の状況を的確に把握するため、日頃から保護者と連絡を取り合う。いじめが起こった場合、学校は被害者と加害者それぞれの保護者に連絡し、三者が連携して適切な対応を行う。

(2) 地域

学校は、校外における児童生徒の状況を的確に把握するため、日頃から民生委員、主任児童委員、青少年相談員や家庭相談員、地域住民等と連絡を取り合う。いじめが起こった場合、必要に応じて、協力を得ながら対応する。

(3) 関係機関

学校だけでの対応では、指導に十分な効果を上げることが困難であると判断した場合は、速やかに警察、児童相談所、法務局等の関係機関に相談する。

なお、いじめられている児童生徒の生命又は身体の安全が脅かされているような場合には直ちに警察に通報する。

(4) 学校以外の団体等

塾や社会教育関係団体等、学校以外の場で起きたいじめの連絡を受けた場合、当該団体等の責任者と、児童生徒が在籍する学校が連携して対応する。

(5) その他

いじめに関係する児童生徒が複数の学校に及ぶ等の場合には、関係学校が連携していじめ問題に対応する。

4 教職員の研修

いじめ問題に対する理解を深め、いじめ防止等を図るため、学校内における教職員研修の充実を図る。

- (1) 実践的研修を行い、いじめの未然防止、早期発見、早期解消に向けた技能の習得、向上を図る。
- (2) 事例研究を通して、いじめの具体的な対応方法の共通理解を深める。特に、いじめに対しては教職員が一人で抱え込まず、組織で対応するという共通認識を図る。併せて、同様のいじめの再発を防止する。
- (3) インターネットを通じて行われるいじめに対応するため、絶えず最新のインターネット環境等に対する研修を行い、教職員全体の徹底した情報モラルへの理解を深める。

IV 家庭の役割

子どもの成長にとって、家庭教育の役割は極めて重要である。保護者は子どもに対して、生活のために必要な習慣を身に付けさせるとともに、自立心を育成し、心身の調和のとれた発達を促すよう努める。そのためには、保護者が子どもの教育に対する責任を自覚し、愛情をもって育てることが大切である。

市では、以下の事項について様々な機会を通じて、保護者等への広報啓発活動を実施し、いじめ防止等について支援する。

1 保護者の責務

- (1) 子どもの話に耳を傾け、子どものよさを認めるなどして、子どもの理解に努める。
- (2) 学校と日頃から連絡を取り合うとともに、授業参観や学級懇談、家庭教育学級等の機会を利用しながら、子どもの学校生活の把握に努める。
- (3) 国、県、桜川市、学校等や地域社会が講じるいじめ防止等のための取組に協力する。
- (4) 情報モラルの理解に努め、子どもがインターネット利用の社会的ルールやマナーなどを身に付けられるよう努める。

2 未然防止と早期発見

- (1) 子どもの話に耳を傾け、「認める」、「ほめる」、「しかる」ことを通して、子どもにきまりを守るなど「規範意識」を身に付けさせるように努める。
- (2) 家庭教育学級等に参加しながら、子どもをどのように教育していけばよいのかについての学習に努める。
- (3) 子どものささいな変化を見逃さず、困っている様子があれば、子どもの話に真剣に耳を傾け、いじめの未然防止や早期発見に努める。その際、事実関係を冷静に判断し、必要がある場合は、学校や専門機関に相談する。

- (4) 子どものスマートフォンやゲーム機等の使用については、家庭で約束事を決めるとともに、インターネットを通じて行われるいじめの被害を受けていないか、又は誹謗中傷等の書き込みを行っていないかなどについての確認を定期的に行う。

3 早期解消に向けた取組

- (1) 子どもがいじめを受けた場合には、身体の安全を確保するとともに、学校と協力していじめの解消を図る。
- (2) 子どもがいじめをした場合には、その行為をやめさせるとともに、速やかに学校へ相談する。
- (3) 子どもを通して、いじめの情報を把握したときには、子どものいじめとの関わりを確認するとともに、速やかに学校へ連絡、相談する。

V 地域の役割

いじめはいつでもどこでも起こりうるので、いじめ防止等のためには、地域と学校の連携が重要である。また、大人たちが積極的に関わるなど、家庭と地域社会が一体となって児童生徒に関わるという連帯感が大切である。

市では、以下の事項について、様々な機会を活用して、広く市民への周知、啓発を図る。

1 未然防止に向けた取組

- (1) 地域と学校とが互いの情報を共有したり、それぞれの活動に協力したりすることを通して、常に連携を図るよう努める。
- (2) 地域は、青少年育成者等を効果的に活用し、児童生徒の社会性や協調性、規範意識や人を思いやる心を育てるために、地域の行事や体験活動への参加を促すなど、様々な交流や体験を通して、児童生徒同士、また児童生徒と地域住民との心の結びつきを深める環境づくりを推進する。

2 早期対応に向けた取組

- (1) 地域の住民、企業の従事者、商店や商業施設等の経営者等は、地域においていじめ又はいじめと疑われる行為を認めたときには、当該児童生徒に声掛けを行う等をして様子を見るとともに、県教育委員会、市教育委員会、又は最寄りの学校へ連絡することに努める。
- (2) 民生委員、主任児童委員、青少年相談員や家庭相談員等は、地域においていじめの発見に積極的に取り組み、いじめ又はいじめと疑われる行為を認めたときには、市教育委員会及び学校と協力して対応する。